128 トッパンホールプレス
［Mar. 2024］隔月発行

TOPPAN HALL PRESS

クァルテット・インテグラ（2023.10.1）© 大窪道治

Artist Interview

クァルテット・インテグラ
新生インテグラ、第２章への航海のはじまり

〈歌曲の森〉～詩と音楽 Gedichte und Musik～ 第29篇／第30篇

クリストフ・プレガルディエン（テノール）＆ ミヒャエル・ゲース（ピアノ）
ディクションの美しさに魅せられて　　蔵原順子

ジャン＝クロード・ペヌティエ（ピアノ）
寛容をたたえた音楽――巨匠の愛に触れる　　梅津時比古

［ Schedule 2024.3～8 ］
［ Information ］
［ Review ］開館23周年バースデー、ハーゲン・クァルテット、フォーレ四重奏団
辻 彩奈＆阪田知樹、周防亮介、谷 昂登＆水野優也――３公演セット券発売！
ランチタイムコンサート Vol.127 特別企画 北村 陽（チェロ）
山田剛史 ピアノ リサイタル

Artist Interview

クァルテット インテグラ

昨年のリゲティ・プロジェクト（5月）、開館23周年バースデー公演（10月）で、研ぎ澄まされた集中から繰り出す、息もつかせぬ強靭なアンサンブルが鮮烈なインパクトを与えた、クァルテット・インテグラ。この5月から、そんな彼らとの新プロジェクトが始動します。初回公演を前に、クァルテット結成から今回のプログラム、さらに新メンバーへの想いまで、たくさんのお話を聞きました。

新生インテグラ、第2章への航海のはじまり

聞き手：西巻正史（トッパンホール プログラミング・ディレクター）
インタビュー写真：藤本史昭／取材・文：トッパンホール

── 昨年は2公演にわたって、非常に強い印象を残していただきました。いまもお客さまや関係者間で話題にのぼるほどですが、トッパンホールで弾いてみて、印象はいかがでしたか？

菊野：僕はドヴォルジャーク(*)も含めて3回、ステージに立たせていただきましたが、作曲家の意図や作品の持つ響きが自然に現れる印象を持っています。リゲティの弦楽四重奏曲第1番のときは透き通った音の響きがつくりやすかったですし、バースデー公演の《死と乙女》では、お客さまも巻き込んでのグルーヴを感じました。曲ごとの雰囲気をつくるというより、表現“できる”事を感じさせてくれるホールと言いますか。

苦しくも楽しい、“室内楽の魔力”から逃れられない

菊野凛太郎
Rintaro Kikuno, violin

三澤：トッパンホールは、ほかでは聴けないプログラムをやっている印象があります。オール・リゲティなんて、わたしは大好きですが、お客さまが来ないんじゃないかって思ってしまう。でもまったく逆で、めちゃくちゃ熱狂的なお客さまがたくさんいらしていた。《死と乙女》のときもとても盛り上がって、まるで海外のホールで演奏している気分でした。熱い方たちが集まる場所なんだと思いましたし、すごく貴重な体験で嬉しかったです。“ここなら何でもできる！”と思わせてくれました。

山本：リハーサルのときから“このホールには独特な雰囲気があるな”と感じました。ほかでは感じない、いい意味での緊張感のような空気が満ちていますね。

── 世界各地のホールと比べて、どんな違いを感じますか？

三澤：ステージと客席で聴こえ方のギャップが大きいホールは弾いていて大変ですが、トッパンホールは、自分に聴こえている音がそのまま客席に届くので、安心して本番に臨めます。

菊野：どんな場所で弾いても、ちゃんと「インテグラの音楽」を伝えたいわけですが、その難しさはなかなかです。

山本：響きの量が違うとテンポも変わってきますし、ホールで弾くときはそのバランスの調整が毎回難しい。リハーサルでできるだけホールの音響特性をつかむことが大事になりますが、トッパンホールではそこに割く時間が少なくて済みます。

── 5月の公演でも、ホールでのリハで存分に表現を磨いていただければと思います。クァルテットはいま、何年目ですか？

菊野：一緒に弾き始めたのが2015年ですから、9年経ったのかな。山本くんからメンバーそれぞれに声がかかって、当時、僕と三澤さんは高校2年生、山本くんは大学1年生でした。僕はそのときにはまだ、クァルテットをちゃんと聴いたことがなかったんですけど、活動していくなかでどんどん好きになっていきました。

三澤：私はもともとアンサンブルが好きで、クァルテットを弾いたのも早くて、最初は小学2年生のときでした。当時教えていただいていた佐々木歩先生の旦那さま、佐々木亮先生と発表会でご一緒してハイドンの1stを弾いたんです。それがきっかけで、ぐんぐんのめり込んでいきました。クァルテットはアンサンブルが最大限に楽しめるジャンルだと、以来ずっと感じています。

山本：僕は高校に入ってからクァルテットでヴィオラを担当するようになり、それがとても楽しくて、ヴィオラへの転向を真剣に考えたんです。ヴィオラよりも先にクァルテットへの想いがあったと言えるかもしれません。早くからクァルテットとして活動したいと思っていて、みんなを巻き込みました。

三澤：引っ張られました（笑）。その頃、ソロを大変だと感じていたので、クァルテットが救いの場所になっていた部分もあり、山本くんに「このグループをなくしてはダメだ！」と言われて彼についていった結果、いまがあるという感じです。

山本：実はそう熱い話でもなくて（笑）、桐朋学園では室内楽のグループは1年ごとに更新していくシステムなので、最初の年だけで辞めようとしていたのをまだ続けたい、と思って引き止めたんです。

── 楽しさの反面、つらいと感じることもありますか？

三澤：最初はつらくなかったな。

山本：ここ数年ですね、そう感じるようになったのは。いつも必死です。

菊野：結成から2～3年はただただ楽しくて、ソロのときよりも本当の自分になれるような感じがして、いつの間にか室内楽にどっぷり浸かっていました。最近は楽しさに加えて苦しさも増えてきて、でもその苦しさを求めてしまう部分もあって、つらい淀み、みたいなものからなぜか離れられない。これが“室内楽の魔力”か…って。

── まさにヌマってますね。実にいいです。その後、2021年にバルトークで優勝、2022年にミュンヘンで第2位と著名なコンクールで名をあげられたあと、現在ロサンゼルスに留学中ですね。日本だけでなくアメリカ、ヨーロッパでも公演されていますが、広く演奏活動しながら学んでる人って、あまりいないでしょう。

山本：学ぶための留学なので、一定程度はアメリカにいられるようにしています。

菊野：学内のコンサートも結構ありますしね。幸いにも学校の真上に寮があって、24時間音出しできるので、いつでも会ってあわせられる環境です。

── 新メンバーのパクさんも同じ学校ですよね。どんな方ですか？

菊野：まだ21歳ととても若いですが、クァルテットをやりたい、という強い気持ちを持った人です。作品の本質を本能で捉える力があって、僕もわりとそっちのタイプなのでシンパシーを感じています。

三澤：いちばん若いのに、精神年齢はいちばん高い。リハーサル中、たまに意味のない言い合いをしていると、「時間が減ったよ」と冷静に言われて我に返ったり（笑）。

山本：僕は、彼女がピアノ・トリオを弾いているのをずっと聴いていたんですが、クァルテットのほうが絶対合うのになぁ、と思って声をかけたんです。クァルテット脳を持っているというか、こちらが投げかけたことを瞬時に理解して返してくれるので、一緒にやればやるほど音楽が無限に拡がっていく気がする。僕らのなかに新しい脳みそがひとつ増えた感じで、新しいインテグラの誕生に自分たちで期待しています。

── それは、ますます無敵になりそうですね。では、今回のプログラムについてお聞きしましょう。

山本：初めての単独出演にあたってバルトークをご提案いただき、ならば、バルトーク・コンクールでも弾いた、僕たちの強みがいちばん活かせる第5番をやろうと。この曲は複雑に入り組んだ部分があって…。

三澤：4人の個性が混ざり合うようなイメージ。

4人の個性が混ざり合うことで生まれる音楽が私たちの強み

三澤響果
Kyoka Misawa, violin

山本：そう。この曲にはすごく速いフーガがあって、規模感や音量からみてもプログラムの最後に弾くのが一般的だと思いますが、ベートーヴェンにプライオリティを置いている感じを出したかったので、あえてこの曲順にしました。ベートーヴェンは後期だとさすがに重たすぎるし、バルトークと変にぶつかってしまう気がしたので、C-durで長すぎない《ラズモフスキー第3番》を合わせたんです。バルトークの凝縮度の高い音楽と、ベートーヴェンのポジティブな気質が表現されている《ラズモフスキー》。作曲家の対比が面白いんじゃないかな、と。聴きなれているはずのベートーヴェンが、きっとフレッシュに聴こえると思います。

── ベートーヴェンは初期を組み合わせて、バルトークは最後に置くだろうと想像していたので意外でしたが、素晴らしい発想です。ドビュッシーはよく弾いているんですか？

菊野：結成年に取り組んだ曲で、何年かに1度は必ず弾いています。

三澤：初めてのコンサートで弾いたのもドビュッシーでした。

菊野：バルトークとベートーヴェンは僕らのコアだと思っていて、いつもプログラムのベースとして考えています。そこに、クァルテットとして最初に取り組んだドビュッシーを組み合わせた今回の内容は、僕らの第2章の始まりとして相応しいのかな、と感じています。

山本：ホールからの提案を受けてつくったプログラムですが、自分たちにとって大事なコンサートで、プログラムにも思い入れがあります。日本だけで活動していたらこういうプログラムは思い浮かばなかっただろうし、クァルテット・インテグラがどういうグループなのかを知ってもらえる良い機会だとも感じているので、力を注いで臨みたいと思います。

バルトークとベートーヴェン、作曲家ふたりの対比が面白いプログラム

山本一輝
Itsuki Yamamoto, viola

── 来年以降もステージが続きますが、今後取り組んでみたい作品はありますか？ たとえば、20世紀、21世紀の作品はご自身たちとの距離感としていかがでしょう。

三澤：常に触れていたいと思っていますし、もっと挑戦していきたいです。もしかしたらそっちのほうが生き生きしているかも。

菊野：そういえば、昔、ハイドン全曲やってみたいって言ってなかったっけ。

三澤：今もチャレンジしたいとは思ってるけど…。えっ、次はハイドンと現代曲!?

山本：レパートリーの幅広さは大事にしたいと思っていますが、でも、現代曲のグループにはなりたくないし、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンのグループにもなりたくありません。バルトークを軸にしつつ、古典と現代にチャレンジできればいいですね。

── “弦のトッパン”としては、ショスタコーヴィチへの関心もお訊ねしたいです。

菊野：実はまだ、1曲しか取り組めていません。

山本：けどやってみて感触が良かったので、バルトークとは全く違う世界ですが、いつかショスタコーヴィチ全曲に取り組めたらと思っています。でも作品が多いので、どこから手をつけたらいいのやら…（笑）。

── ではそれは、いつかの未来に。まずは5月、楽しみにしています。

（2024年1月取材）

＊〈ランチタイムコンサート Vol.111〉サマースペシャル（2021年8月24日）

クァルテット・インテグラ
2024年5月30日（木）19:00
クァルテット・インテグラ
［三澤響果、菊野凛太郎（ヴァイオリン）／山本一輝（ヴィオラ）／パク・イェウン（チェロ）］
ドビュッシー：弦楽四重奏曲 ト短調 Op.10
バルトーク：弦楽四重奏曲第5番 Sz102
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第9番 ハ長調 Op.59-3《ラズモフスキー第3番》
5,500円／U-25 2,500円　全席指定

ディクションの美しさに魅せられて

ドイツ語通訳 **蔵原順子**

ドイツ語通訳者として、世界の名だたるアーティストや音楽関係者から絶大な信頼が寄せられる、蔵原順子（くらはら・かづこ）さん。そのフィールドは広大で、通訳、翻訳からG7など重要な国際会議や、ときにはスポーツの中継での同時通訳も務め、広い見識に裏打ちされた正確な訳は、政治から文化まで多くのコミュニケーションの現場を支えています。トッパンホールでもこれまで数度にわたり、フォーレ四重奏団の公開マスタークラスなどでその見事な手腕を奮っていただき、アーティストとお客さまの素晴らしい橋渡しをしてくださいました。そんな蔵原さんは一方で、音楽を心から愛し、アーティストに敬意を寄せる、熱心な聴き手でもいらっしゃいます。そしてトッパンホール主催公演のなかで、特にお越しを欠かさないのが、プレガルディエン&ゲースのコンサート。今回は、来たる5月の彼らの公演を前に、ドイツ語のプロフェッショナルである蔵原さんに、ドイツ歌曲の真髄を届け続けるふたりの魅力を語っていただきました。

＊　＊　＊

私は音楽の専門家ではありませんし、ずっと、人の言葉を通訳する人生ですので、自分の言葉で何がお伝えできるかしらと思うのですが、絶対的な“推し”であるプレガルディエンさんとゲースさんについてということで、少しお話してみたいと思います。

最初に私とドイツ語について触れておきますと、生まれは日本ですが、父の仕事の関係で8歳からしばらく、ドイツで暮らしていました。ある程度日本語が身についた状態で新たな言語を学ぶことになったのは、いま考えればいいタイミングだったのかも知れません。帰国後も独逸学園で学びましたので、日本語もドイツ語も私にとっては同じように自然でした。通訳の仕事は、学生時代のアルバイトからはじまり、言葉がわかれば通訳ができる、という簡単なものでは当然ありませんでしたけれども、何かしら、仕事が私を選んでくれたのでしょうか。ずっとこの仕事を続けています。

プレガルディエン&ゲースを初めて聴いたのは、2015年です。マーラーの《子供の魔法の角笛》がプログラムされていたので、興味を惹かれました。おふたりのことは寡聞にして存じ上げなかったのですが、トッパンホールの企画は信頼がおけますし、なにより《角笛》が好きなのです。ドイツのマザー・グースとも呼ばれる民衆歌謡詩集で、ドイツで暮らしていたころには、昔の飾り文字のような字でテキストが印刷されて、挿絵が白黒の切り絵だったか版画だったかで入っていた、真四角の本が家にあったのを覚えています。

そうして聴いたプレガルディエンさんの歌唱でしたが、「――ドイツ語が聞こえる!!!!」…それは、息を呑むような衝撃でした。「ドイツ語のオペラとか歌とか、全部わかっていいわね」と時々言われますが、とんでもない。字幕があるとありがたいくらいです。ですので、第一声から本当に驚きました。言葉が、すべて筆記できるほど美しく耳に届いてくる。ドイツ歌曲自体はそれまでも聴いていましたが、ネイティヴの歌の上手な人でもテキストがちゃんと聞こえるかというと、そうではない。歌はそれくらい難しいのでしょう。でも、プレガルディエンさんの歌は、言葉がその中身まで伴って自然に意識に滑りこんできたのです。確かシェイクスピアが「薔薇は、たとえどんな名前で呼ばれても甘く香る」と書いていたと思いますが、やっぱり甘い香りは“甘い”という単語じゃないと甘い響きはしないですよね。プレガルディエンさんは、ディクション（＊）が驚くほど明晰で、言葉を内面化し、音楽と一体にした表現でとても自然に歌を差し出されるのです。恣意的なことが一切感じられず、発語の秘密を知りたいと、その後もずっと聴き続けていますが、いまだに謎は解明できません。

〈歌曲（リート）の森〉～詩と音楽 Gedichte und Musik～

クリストフ・プレガルディエン（テノール）&ミヒャエル・ゲース（ピアノ）

第29篇「別れ そして 旅立ち」
2024年5月22日（水）19：00

シューベルト：
逢瀬と別れ D767／星 D939／夜の曲 D672／弔いの鐘 D871／さすらい人 D489／さすらい人の夜の歌Ⅰ〈汝、天より来たりし者〉D224／ヴィルデマン山地を越えて D884／精霊の踊り D116／魔王 D328／さすらい人の夜の歌Ⅱ〈山々に憩いあり〉D768／あこがれ D879／ミューズの息子 D764／ブルックの丘にて D853／夕映えの中で D799／休みなき愛 D138／とらわれの狩人の歌 D843／竪琴弾きの歌より〈われ戸口にしのび行かん〉D479／さすらい人 D649／さすらい人の月に寄せる歌 D870／孤独な人 D800／船乗り D536／御者クローノスに D369／《白鳥の歌》より〈影法師〉D957-13／夜と夢 D827

第30篇「生と死のはざまで」
2024年5月24日（金）19：00

J.S.バッハ：甘き死よ、来たれ BWV478
マーラー：《子供の不思議な角笛》より〈原光〉
シューベルト：白鳥の歌 D744 Op.23-3
シューマン：《12の詩》より〈愛と喜びよ、消え去れ〉Op.35-2
シューベルト：消滅 D807
モーツァルト：ラウラに寄せる夕べの想い K523
ブラームス：《6つのリート》より〈野の寂しさ〉Op.86-2
ブラームス：《ブラーテンとダウマーによるリートと歌》より〈夜更けて、私は起き上がり〉Op.32-1
レーヴェ：《3つのバラード》より〈エドヴァルト〉Op.1-1
ヴォルフ：《メーリケ詩集》より〈それを思え、おお魂よ〉
シューベルト：若者と死 D545
シューベルト：死と乙女 D531
ヴォルフ：《ゲーテ歌曲集》より〈アナクレオンの墓〉
ヴォルフ：《アイヒェンドルフ歌曲集》より〈セレナード〉
メンデルスゾーン：《6つの歌》より〈新しい恋〉Op.19-4
レーヴェ：《3つのバラード》より〈魔王〉Op.1-3
ヴォルフ：《スペイン歌曲集》（世俗篇）より〈いつの日か、わが想いは〉
シューベルト：《白鳥の歌》より〈兵士の予感〉D957-2
マーラー：《子供の不思議な角笛》より〈死んだ鼓手〉

（各日）6,500円／U-25 3,000円　全席指定
2公演セット券11,180円／トッパンホールクラブゴールド会員9,880円

特別協賛：株式会社 竹中工務店
協賛：artience株式会社／東京書籍株式会社／図書印刷株式会社／TOPPANエッジ株式会社

かたやゲースさんのピアノも、最初に聴いたときから何かが違いました。いわゆる歌伴とはまったく異なり、歌と一緒に言葉と意味とを紡ぎだしているのがとても伝わります。以前、朝日新聞のおふたりへのインタビューを通訳させていただいたときに、プレガルディエンさんが「ゲースとなら、そのたびに違う解釈で表現できる」という趣旨のお話をなさっていましたが、おふたりはその都度、セッションしながら瞬間瞬間のステージを生き、いま生まれた音楽として、歌を聴かせてくださっているのだと思います。

今回は、いわゆる愛唱曲集のような趣の二夜ですよね。深い森や夜の闇、長く重苦しい冬など、独特の気候や環境に育まれたドイツらしい文化の気配が、タイトルからだけでも立ちのぼってくるようです。詩と音楽が一体になった歌曲芸術の真髄は、言葉とその本質が聴き手に届けられなければ、本当には味わえないと思います。それぞれに稀有な音楽家であるプレガルディエンさんとゲースさん、おふたりが紡ぐ宝物のような音楽に触れられるのは、幸福そのものであり、奇跡とすら感じます。5月のステージが待ち遠しいばかりです。　（談）

＊diction［仏］：特に音楽で、歌曲などの詞の発音のしかた

寛容をたたえた音楽――巨匠の愛に触れる

梅津時比古

10年ほど前、雪まじりの寒風が吹き付けるフランス・ナントで開かれた「ラ・フォル・ジュルネ」音楽祭で、ペヌティエは、フランスの現代作曲家、モーリス・オアナ（1914～1992）を取り上げた。当時、フランスは、旧植民地のマリ（西アフリカ）におけるイスラム過激派の騒乱や軍のクーデターに手を焼いてフランス軍を投入、殺伐とした戦時体制にあった。対照的に、音楽祭の穏やかな光景は、社会の緊張感と掛け離れている。しかし、「ラ・フォル・ジュルネ」が開かれているナントの複合ビルの何でも無い一室で、ペヌティエが作品特集をしたオアナの演奏は、曲の内面的な本質に外の世界の荒々しい出来事が刺さってくることを確信させた。

オアナ《解釈のエチュード》のぽつんとしたピアニッシモの断片から始まる無調の響きは、ペダルの操作でかすかにゆらめかせる弦の余韻や、特別に作られた2種類の定規を取り出して鍵盤の上にあてて弾くクラスターの深い響きを経て、やがて低音がうごめき、高音がたたきつけられ、狂乱と沈黙の錯綜を生む。この世で対話が成り立たないことの象徴のように。オアナがやはり旧フランス領のカサブランカ（モロッコ）で生まれた人種的な経緯も、ペヌティエの意識の内に入っているのだろう。

すぐさまペヌティエにインタビューを申し込むと、全く飾らない人柄に、滲み出るような笑顔のペヌティエが黒のタートルネックのカジュアルな服装でやってきた。彼が商業主義に一切乗らず、ピアニストであると共に正教会の神父であること、異なる宗教の聖職者や哲学者に定期的に集まってもらい「世界の寛容」をテーマに論議を重ねていることなどを初めて知った。『音楽も寛容に資するひとつと思う』とペヌティエは静けさをたたえた眼で語った。

その後、ペヌティエを各地で聴き続けたが、2014年から招聘しているトッパンホールこそが、日本でのペヌティエのふるさとであろう。ここで会うときのペヌティエは、ナントのときと同じように、いつも飾らずに穏やかで、そして本質的なプログラムを展開する。とりわけ2014年のショパン《前奏曲》とフォーレ《前奏曲》を交互に弾く試みは、夢のさなかに啓示を受けるかのような体験であった。

昨年（2023年）5月には「80歳アニヴァーサリー」として、愛奏しているすべて、ハイドンからオアナまでを、まるで自宅の部屋で弾いている風情で3部にわたってトッパンホールで繰り広げた。堪能したあと楽屋に駆けつけ、なぜかもう来日は無いものと勝手に思い込んだ。予想は嬉しいはずれとなり、この4月にペヌティエはトッパンホールの舞台に上がる。しかも2夜にわたって。

第1夜（4/12）のシューベルト、フォーレ、ドビュッシーは、ペヌティエが独自の音色を培ってきた世界である。第2夜（4/15）は、日本ではあまり取り上げなかったモーツァルトを特集する。作曲家自身が編曲したピアノ協奏曲第12番イ長調K414の弦楽四重奏共演版には、湯本亜美（ヴァイオリン）、渡邉ゆづき（同）、柳瀬省太（ヴィオラ）、笹沼樹（チェロ）らが加わる。ペヌティエの投げかける音に日本の気鋭がどのように応え、溶け合うか、これも期待する要素である。

世界はウクライナ、ガザに苦しんでいる。

寛容を生み出す厳しさに触れる2夜になるだろう。

（うめづ・ときひこ／音楽評論家）

ジャン＝クロードペヌティエ（ピアノ）

2024年4月12日（金）19：00　第1夜――リサイタル

シューベルト：4つの即興曲 D935
フォーレ：舟歌第2番 ト長調 Op.41
フォーレ：主題と変奏 嬰ハ短調 Op.73
フォーレ：夜想曲第6番 変ニ長調 Op.63
ドビュッシー：喜びの島

2024年4月15日（月）19：00　第2夜――モーツァルトと遊ぶ

湯本亜美、渡邉ゆづき（ヴァイオリン）／柳瀬省太（ヴィオラ）／笹沼 樹（チェロ）
モーツァルト：ピアノ協奏曲第12番 イ長調 K414
（作曲者自身の編曲によるピアノと弦楽四重奏版）
モーツァルト：ピアノ四重奏曲第2番 変ホ長調 K493

（各日）7,500円／U-25 3,500円　全席指定

公開マスタークラス

2024年4月10日（水）　＊詳細はWEBサイトにてご案内します

SCHEDULE 2024.3～8 主催公演

トッパンホールチケットセンター 03-5840-2222
（10：00～18：00 土日祝休）

日時			公演
3／	10	(日) 17:00	**岡本侑也**(チェロ) ― **無伴奏 Ⅱ**　特別協賛：株式会社 安藤・間
	13	(水) 19:00	**アレクサンドル・メルニコフ**(ピアノ)　特別協賛：鹿島建設株式会社
4／	12	(金) 19:00	**ジャン=クロード・ペヌティエ**(ピアノ) 第1夜―リサイタル 第2夜―モーツァルトと遊ぶ 湯本亜美、渡邉ゆづき(ヴァイオリン)／柳瀬省太(ヴィオラ)／笹沼 樹(チェロ)
	15	(月) 19:00	
5／	22	(水) 19:00	〈歌曲の森〉～詩と音楽 Gedichte und Musik～ 第29篇／第30篇 **クリストフ・プレガルディエン**(テノール)＆**ミヒャエル・ゲース**(ピアノ) 特別協賛：株式会社 竹中工務店
	24	(金) 19:00	
	30	(木) 19:00	**クァルテット・インテグラ**

日時			公演
6／	28	(金) 19:00	**ベルチャ・クァルテット**
7／	19	(金) 19:00	**辻 彩奈**(ヴァイオリン)＆**阪田知樹**(ピアノ)　特別協賛：株式会社 竹中工務店
8／	8	(木) 19:00	**周防亮介**(ヴァイオリン)　**イザイ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ全曲**
	20	(火) 19:00	**谷 昂登**(ピアノ)＆**水野優也**(チェロ)
〈ランチタイムコンサート〉 トッパンホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート　［全席指定］			
4／	5	(金) 12:15	Vol.127　特別企画 **北村 陽**(チェロ)

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービスをご利用いただけます[有料・要予約]。
お申し込み・お問い合わせは(株)マザーズ 0120-788-222まで。

2024年2月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています　※WEBチケットもご利用いただけます　www.toppanhall.com

INFORMATION

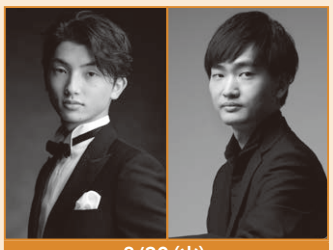
鮮烈なインパクトを残して、シーズン後半へ――

トッパンホール23周年バースデーコンサート（2023.10.1）
A 周防亮介、小川恭子、中 恵菜、田原綾子、笹沼 樹、佐山裕樹
B 周防亮介、笹沼 樹、兼重稔宏
C クァルテット・インテグラ
D 兼重稔宏
E ハーゲン・クァルテット(2023.11.1)
F フォーレ四重奏団(2023.12.7)

2023/24シーズンも、まもなく折り返し。秋から冬へ向かった10月～12月の充実は早くも、年末から年明けにかけたWEBを含む音楽専門各誌の年間回顧で数多く触れられ、記憶に刻まれたステージとして、そのほとんどがベスト・コンサートにランクインしました。30年超の歩みの重みを感じさせながらも、つねに新しい挑戦を続けるハーゲン・クァルテットが3日間の公演を通して聴かせた驚くべき新境地は、“ついに突き抜けた”印象を鮮烈にもたらし、聴き手を、躊躇すら覚えさせる未知の領域へと誘いました。メンバー間の強い信頼から生まれるあたたかくも鮮烈なフォーレ四重奏団の“いまを生きる”音楽の手触りは、公演前日の公開マスタークラスからの地続きで奏でられ、“自らの教えを自ら実践する”という強い気概も込められたステージは、沸騰するほどの熱を帯びて客席を歓喜に巻き込みました。トッパンホールの空間を熟知し、主催公演を象徴するふたつのクァルテットは、今回も一期一会、生命力に満ちた音楽のひとときを、悦びとともに届けてくれたのです。

そして、そんな彼らに劣らずの大きな反響を呼んだのが、開館23周年のバースデーコンサートに集った、日本の若手俊英たち。周防亮介（vn）、笹沼樹（vc）、兼重稔宏（pf）による練られたシューベルトのトリオ1番にはじまり、世界的快進撃を見せるクァルテット・インテグラは続いてエッジの効いた《死と乙女》、ベルクの2曲を。文字通り間奏曲となった兼重のあたたかなブラームス Op.117をはさんで、最後はシェーンベルク《浄められた夜》。周防、笹沼に、小川恭子（vn）、中恵菜／田原綾子（va）、佐山裕樹（vc）が加わり、1曲めから高い集中と濃度の高さに息をのんでいた客席を、さらなる恍惚へと導きました。終演後は、演奏への驚嘆と感心とともに「日本音楽界の未来は明るいですね」などの声が相次ぎ、創意に満ちたひとときは、シーズンの開幕と先行きを輝かしく照らしました。

ほかにも、久しぶりとなったティル・フェルナー（pf）の心深くに沁みた忘れ難いリサイタル、トッパンホールがその顔合わせを演出したアレクサンドル・カントロフ（pf）とズラトミール・ファン（vc）天才ふたりによる躍動感あふれるデュオ、超絶技巧が凄すぎてむしろ音楽に集中できてしまったラファエル・アギーレ（gui）、今回もユニークなキャラクターで客席を魅了したアレクサンドル・タロー（pf）と、個性豊かなラインナップがそれぞれ強い輝きを放った主催公演は、いよいよ春へと向かいます。



7/19（金）	8/8（木）	8/20（火）
辻 彩奈（ヴァイオリン）＆阪田知樹（ピアノ）	周防亮介（ヴァイオリン）	谷 昂登（ピアノ）＆水野優也（チェロ）

発売日：3/27（水）［会員3/23（土）］　一般・レギュラー会員 12,900円　ゴールド会員 11,400円　限定数販売

3公演セット券発売!!

この夏は、いまをトキメク期待の若手をまとめてキャッチ！ 2年前、抜群の相性で白熱のステージを繰り広げた辻彩奈＆阪田知樹の再登場、周防亮介の夏の無伴奏は今回はイザイ全曲、そして今回が初共演の谷昂登＆水野優也はベートーヴェン＆ブラームスをじっくりと。若き才能がスパークする3公演を、ぜひ続けてお楽しみください。

音の向こう側へ――Beyond the Tone

じっくり音楽と向き合えるトッパンホールの響きを愛し、繰り返しリサイタルを行うアーティストは少なくなく、ピアニスト山田剛史もその一人です。3度目の登場となる今回も、ライフワークとする「音の…」と題されたリサイタルシリーズをお贈りします。演奏解釈に定評があるJ.S.バッハから近現代作品にも心を寄せつつ、さまざまな“音の姿”を探る本シリーズは、毎回考え抜かれたプログラムで、新たな気づきや喜びを届けてきました。前回（2022年5月）のプログラムノートには、コロナ禍で取り組んだ印象的なレコーディングに触れると同時に、「人間同士が自然な形で音楽を分かち合うことを大切に取り戻したい」という山田自身の言葉が綴られています。作品を探究する山田の熱い想いと、コロナ禍を経て感じた聴衆と分かち合う喜び――トッパンホールだからこそ感じ取ることができる“音楽の力”に、ぜひ触れてみてください。

山田剛史 ピアノ リサイタル ～音の彼方～

2024年4月20日（土）14：00

J.S.バッハ：カプリッチョ 変ロ長調 BWV992
《最愛の兄の旅立ちに寄せて》
ヤナーチェク：霧の中で
ショパン：3つのマズルカ Op.59／
ポロネーズ第7番 変イ長調 Op.61《幻想》
リスト：《詩的で宗教的な調べ》S173より
第3曲〈孤独のなかの神の祝福〉
杉山洋一：君が微笑めば、それはより一層澄んでゆく

全席自由：4,500円／学生3,000円
主催・お問い合わせ：iroha音楽企画　050-3746-1680

チケットのお申し込み：トッパンホールチケットセンター

いま最も輝く俊英、登場！

数多の才能のなかから次世代を担う逸材の渾身のステージをお届けしている〈ランチタイムコンサート〉。4月は、天才少年の呼び声高く、早くから数々の舞台を踏んできたチェリスト北村陽による、60分の特別企画をお贈りします。昨年、ブラームス国際コンクール、日本音楽コンクールに立て続けに優勝し、一段と注目を浴びた北村。現在は、ドイツ・ベルリン芸術大学にてイェンス=ペーター・マインツのもと研鑽を積んでいます。そんな日々のなか、より一層深められた音楽性に期待が高まる今回。バロックから現代まで幅広い作品を集めた超意欲的な“無伴奏”プログラムで、音楽家としての今後を映す真剣勝負のステージに挑みます。憧れのホールと語るトッパンホールへの凱旋公演。どうぞご期待ください。

〈ランチタイムコンサート Vol.127〉特別企画
北村 陽（チェロ）

2024年4月5日（金）12：15

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲第5番 ハ短調 BWV1011より〈サラバンド〉
リゲティ：無伴奏チェロ・ソナタ
三善 晃：C6H（1987）
コダーイ：無伴奏チェロ・ソナタ Op.8

1,500円／トッパンホールクラブ会員無料（要予約）　全席指定
※特別企画につき、有料とさせていただきます。
発売日：3月5日(火)［会員2月27日(火)］

表紙：クァルテット・インテグラ

「生誕100年バースデー！リゲティに感謝を込めて…（2023年5月）」「トッパンホール23周年バースデー（同年10月）」に立て続けに登場。いずれのステージでも圧巻の集中力で快演を聴かせたクァルテット・インテグラ。この5月には、ついに単独公演が実現し、同時に彼らのシリーズがスタートします。新生となり、さらに道を究めゆくインテグラのステージに、どうぞご期待ください！

編集後記

いまをときめくインテグラQへの取材は、とても楽しい時間でした。新しいステージへと踏み出す現在の心境をお伺いでき、記事にさせていただけたのは光栄です。そしてプレガルディエン＆ゲースの大ファンである蔵原順子さんへの取材では、これまでの公演で感じていた、ドイツ語が分からないにも関わらず、なぜかスッと意識の中に入り込んでくる感覚について、蔵原さんのお話を聞いて納得ができました。5月の公演では「ディクションの美しさ」に、ぜひご注目ください！ ところで、花粉が飛び始めたらしく、さほど敏感でない私でもムズムズ…。みなさん、一緒に乗り切りましょう！　（雪）

発行日：2024年3月1日　発行・編集：株式会社トッパンホール 広報部　〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3　(03)5840-2200　https://www.toppanhall.com/　制作：株式会社トッパングラフィックコミュニケーションズ　印刷：TOPPAN株式会社
©TOPPAN HALL 2024.3 KI　※当紙に掲載している内容について、許可なく複製あるいは転用することを固く禁じます。